

1945(昭和20)年5-6月 南信州に空から長い 銀紙が舞い降りてきた

小塩 立吉

大東亜戦争・太平洋戦争勃発と電波管制
1940(昭和15)年は、紀元2600年のお祝いが盛大に行われたが、翌日から急に激しいボスターが貼られた。昭和16年12月8日朝起きるとラジオが臨時ニュースを繰り返して放送していたのを覚えてる。
ところが翌日になると電波管制が実施され東京の電力が急激に落とされ、ほとんど聞こえなくなった。

この状態は、昭和17年8月15日に飯田に中継所が開設された翌年

なあと感じた。「東部軍管区情報」ラジオは通常番組放送中に「ザー音と共に「東部軍管区情報」がどンドン割り込んで入ってきた。「敵機は〇〇〇の進入するをもつて警戒を要す」と言った類いの報道が入ってきた。その内に「敵機は〇〇〇上空にあり、南部長野県警戒を要す」「外に不明目標あるをもつて警戒を要す」というアナウンスもあった。しかし、編隊が進入してくると「南部長野県警戒発令」に変わることがあった。そのころのある夜、一回「空襲警戒が発令」となり、家族で醸造用大釜の焚き口の穴に入り身構えたことがあった。幸い飯田は本格的爆撃には至ら

なかった。電波探知機の性能限界もあり、また米軍機からの「チャフ」によるレーダー妨害があり、爆撃機の把握が混乱し、父が「分からんよつになったな」と呟いていたことがあった。当時全国同一周波数放送(実際には三波)で混信もあり「*舞鶴鎮守府司令長官発令」などの混信も聞いた記憶がある。
東部軍管区情報地図
飯田市は東部軍管区の中に入っており長野地区は北部、南部と分かれていたことが分かる。
長野県へは遠州灘から北上するルート、東に旋回するルート、千葉県に至るルートなどが示されており、

小塩 立吉

終戦直前の名古屋空襲、飯田地方空襲警報が出た頃、銀紙が舞い降りたときのこと。技術者になってから、その銀紙の謎が解けた記録です。 <http://www7b.biglobe.ne.jp/~toshio/> もご覧下さい。

紹介いただきました前次義行さんに御礼申し上げます。

南信州紙が私のホームページを元に11月27日学芸欄に載せてくれました。

え、攻撃の友軍機は与圧が不十分で高く上がれないのも見て取れた。誰の目にも日本が不利でもう無理だと思っただけ、口に出すことはできなかった。ニュース(報道と言った)は、本土決戦を叫んでいた。
8月になると長野、松本が空襲を受け、13日だったと思うが、爆音がするので物干しに上がると明らかに米軍の偵察機が旋回するのを見上げた。多摩川精機を偵察したのである。町の噂は後二、三日で飯田も空襲に遭うと言っていた。その15日、正午に終戦の詔勅が放送された。空から舞い降りてきた長い銀紙

それは「チャフchaff」でした。日本がシンガポールを陥としたとき英軍から捕獲したレーダーを検討したり、TVの送受信技術を研究していたメーカーの技術者がレーダー研究に動員された。(報道と言った)レーダーを完成し、配備が進んでいた。
長野県南部が警戒警報になるようになったある日、空から包帯のように長い銀紙が舞い降りてきた。翌日には子供達が拾い学校に持ってきた。「こりゃ何だ」とわいわいしていたが、誰も知るはずはない。
私が通信工学を学び、就職しレーダー技術者になった時、レーダー妨害技術として「チャフchaff」

を知った。偵察機が相手のレーダーの電波を受信して周波数を知り、その波長に合わせて長尺のアルミ箔テープを切り、大気中にまき散らし地上のレーダーを無視にする技術である。
ハッと15年ばかり前の情景を思い出し、そうだ、あれはチャフだったんだ。
当時75MHzのレーダーの波長は4mであり、アルミ箔の長さを半分2mに切っただけでいいことになる。レーダー電波が半波長のアルミ箔に当たると、共振し実際の面積と比べ大きい反射を起すのである。現代でもかなり効果的な手段である。
比較的ゆらゆら長い

時間掛かって舞い降りる間に爆撃機を飛行させ爆撃を成功させようとする防御電波兵器である。
さて、当時拾った銀紙の長さはいくら位だったのだろうか、3年生の子供が扱いかねるかなり長いものだったように記憶しております、多分合っているんじゃないだろうか。
もう一種のレーダーは150MHzであり、この場合のチャフは長さ1mと言うことになる。
*こしお たつきち 1936(昭和11)年生まれ。飯田市伝馬町出身。東京都日野市在住。

